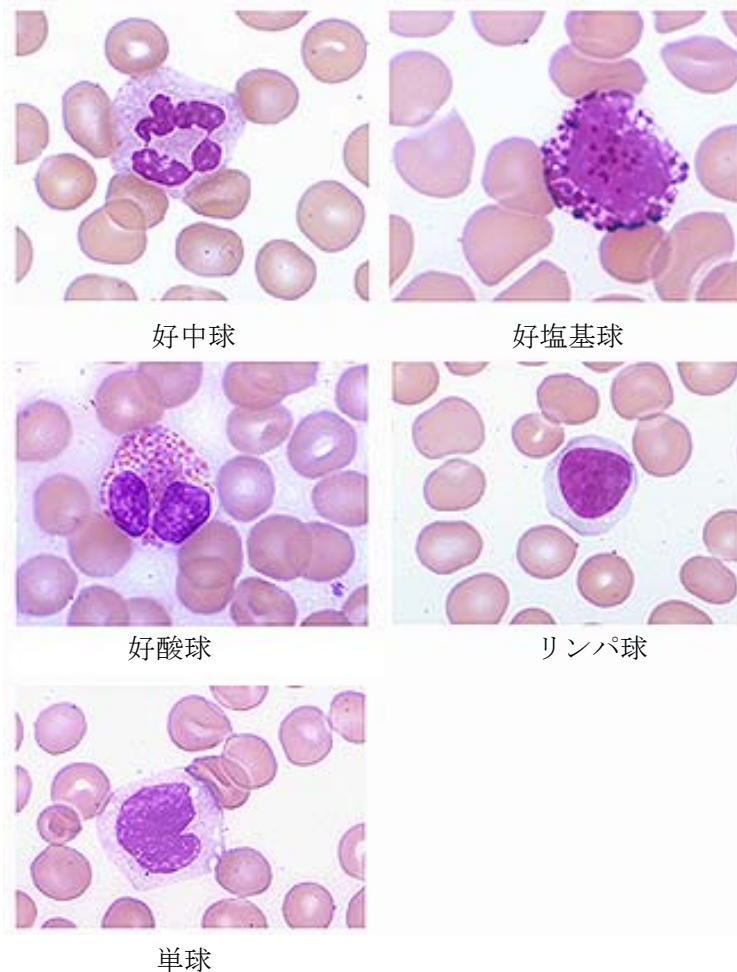


末梢血で見られる白血球



末梢血中で見られる白血球です。白血球は生体防御作用を持ち、病原細菌の排除、毒性の中和などを行います。顆粒白血球の好中球や好塩基球、好酸球は分節核細胞です。好中球の細胞質には好中性顆粒が粒状に見られます。好中球も食作用があります。病原細菌と戦って死ぬと「膿」になります。好塩基球の顆粒は少し大きく、好塩基性で細胞核と同じ紫色で見られます。この細胞は組織中に出て肥満細胞となり、即時型アレルギーに関わり、ヒスタミンやヘパリンを含む顆粒を放出して炎症を起こします。

好酸球の細胞質はエオジンと呼ばれる色素で、好酸性に染まる大きな顆粒を持ちます。末梢血では細胞核は通常2核です。好酸球は寄生虫を攻撃して排除します。またアレルギーにも関与し、上皮剥離など細胞障害を起こす場合があります。

リンパ球は免疫に関与する細胞で、末梢血中では大きさの異なるリンパ球が見られます。リンパ球はTリンパ球(細胞性免疫)とBリンパ球(形質細胞となり抗体産生)に分けられます。単球は組織中に出てマクロファージになり、活発な貪食作用を見せます。この細胞は自然免疫から獲得免疫への橋渡し役の細胞で、抗原を認識してから、Tリンパ球に抗原を提示する働きがあります。